The Kagawa Museum NEWS

Vol.43
香川県立ミュージアムニュース
2018 冬

CONTENTS

特集　猪熊弦一郎らがつくった香川県展の過去、現在とこれから
特別展紹介　第65回日本伝統工芸展
調査研究ノートvol.28　昭和43年 四国山地縦走民家調査
特別展紹介　香川県陶芸協会創立50周年記念展 やきものが好き‼ アートも好き。
展示室だより　道具とくらしのうつりかわり／ 春を探そう

第83回 香川県美術展覧会（洋画部門会場）

今年で83回を迎える全国で最も長い歴史を持つ香川県美術展覧会。会期中の審査員による作品解説（トーク）ではたくさんの方が審査員の言葉に耳を傾けました。洋画について知りたいという方、今後の制作に生かそうとする方、トークの時間が終わって個人的に質問される方と様々ですが、洋画部門では休日や金曜日の夜間開館の時間帯に4回実施し、たくさんの方が参加されました。

特集

猪熊弦一郎氏らがつくった香川県展の過去、現在とこれから

学芸課のロッカーで資料を探しているときに偶然、新聞記事のコピーを見つけました。「香川新報」、現在の四国新聞です。日付は昭和9年（1934）5月1日。昭和60年（1985）に発行された香川県美術展覧会（以下、県展）の歴史を綴った『県展史』の編集作業に際し、広く県民から資料提供を呼びかけ、入手したものということでした。それにしてもコピーとはいえ、よく残っていたものです。紙面には「初夏に咲き誇る讃岐美術の花園」「明一日（原文ママ）から十日迄、三越六階楼上で本縣美術そう合展」とありました。つまり、今年で83回になる県展のスタート、第1回県展創設の記念すべき日です。

戦前から始まった県展は、県主催としては全国で最も長い歴史を持つ公募展です。太平洋戦争の開戦年の昭和16年（1941）と、終戦年の昭和20年（1945）という厳しい時期を除き、県展は続いてきました。文化芸術への県民の意欲は脈々と受け継がれていきます。県展の他にも戦後の高度経済成長期、香川県は県外から流政之（ながれまさゆき）をはじめ、丹下健三（たんげけんぞう）、イサム・ノグチ、ジョージ・ナカシマらを迎え、数々の名作を生みました。その後、現代アートの聖地・直島の誕生、今日の瀬戸内国際芸術祭と香川の芸術は時代の先端を歩んできました。県展はそうした動きのさきがけとして始まったのです。「アート県」香川は昭和初期から始まっていたと言っても過言ではないでしょう。

先に述べた『県展史』中の県展創設時の記述があります。昭和8年（1933）、県知事（当時）の木下義介（きのしたぎすけ）が上京し、中央で活躍する香川県出身の作家を集めて食事会を開きました。集まったのは、日本画の広島晃甫（ひろしまこうほ）、洋画の小林萬吾（こばやしまんご）、彫刻の國方林三（くにかたりんぞう）、小倉右一郎（おぐらういちろう）、池田勇八（いけだゆうはち）、藤川勇造（ふじかわゆうぞう）、新田藤太郎（にったとうたろう）、工芸の北原千鹿（きたはらせんろく）の8人。木下知事の目的は香川の産業である漆器、丸亀の団扇（うちわ）、東かがわの手袋等々の発展です。それら地域産業に都会的な斬新なイメージを加えるために、力を貸してほしいということでした。再度知事が上京した時、日本画の高田美一（たかだびいち）、洋画の猪熊弦一郎（いのくまげんいちろう）、柏原覚太郎（かしはらかくたろう）、工芸の大須賀喬（おおすがたかし）が加わった集会で、作家たちから出された案が、県が主催で年に1回、美術展覧会を開いてはどうか、というものでした。こうして翌9年に県展が始まりました。趣旨は香川県内の美術を育てること。東京で発表されていた新しい表現を県民に見せ、郷土美術界に刺激を与えることでした。第1回の県展は公募ではなく、東京で活躍する日本画、洋画、彫刻、工芸の作家を中心に構成され、日展、春陽会などの入選歴等のある作品が対象だったそうですが、反響が大きかったようです。第2回から一般公募するようになると回を重ねるたびに出品数が増え、香川の美術が盛り上がりはじめました。

時を経て今年で県展が始まって83回が過ぎました。熱心な県展への応募者はまだまだ数多くいらっしゃいますが、将来を危惧する要素も浮上しています。

図のグラフは第60回（1995年・平成7）、第70回（2005年・平成17）、第80回（2015年・平成27）と3回の応募者の年齢別棒グラフ（10歳毎）です。ご覧になっていかがでしょうか。一番の問題は、若年層の応募者が加速度的に減少していることです。このまま推移すると、第90回、第100回はどうなるのでしょう。現在のよ

香川新報の記事（昭和9年5月1日付）

（部分拡大）

県展のスタートを切った高松三越（撮影年不詳）

うな県展は消滅し、審査もなくなり、コンクールからフェスティバルになりかねません。

その背景に表現の多様化があげられます。作品づくりは、自分の思いを形や色に視覚化し、発信しようとするものですが、そこは今も昔も変わらないと思います。しかし表現のための素材や方法が、時代（社会）の変化とともに大きく変化しています。県展もその変化に対応していく事が喫緊（きっきん）の課題と考えています。今までにも応募作品のサイズの上限、下限を変更し、彫刻部門では500kg以上の作品も屋外での募集を始めました。しかし、表現の多様化に対応するためにはさらに改善が必要です。

今後もさらに幅広い層の人たちが関心をもち、出品したくなる、また観に行くのが楽しみとなる展覧会にしていく必要があります。事務局としては将来への不安材料の多い県展をただ指をくわえて見ている訳にはいきません。猪熊弦一郎氏らが香川の美術に刺激を与えるため、新しい美術を見せることによって活性化を図った発足時に立ち返り、香川県展の継続、さらに発展のために変化し続けることを念頭に置いて取り組んでいきたいと考えております。

（主任専門学芸員　橋本 武生）

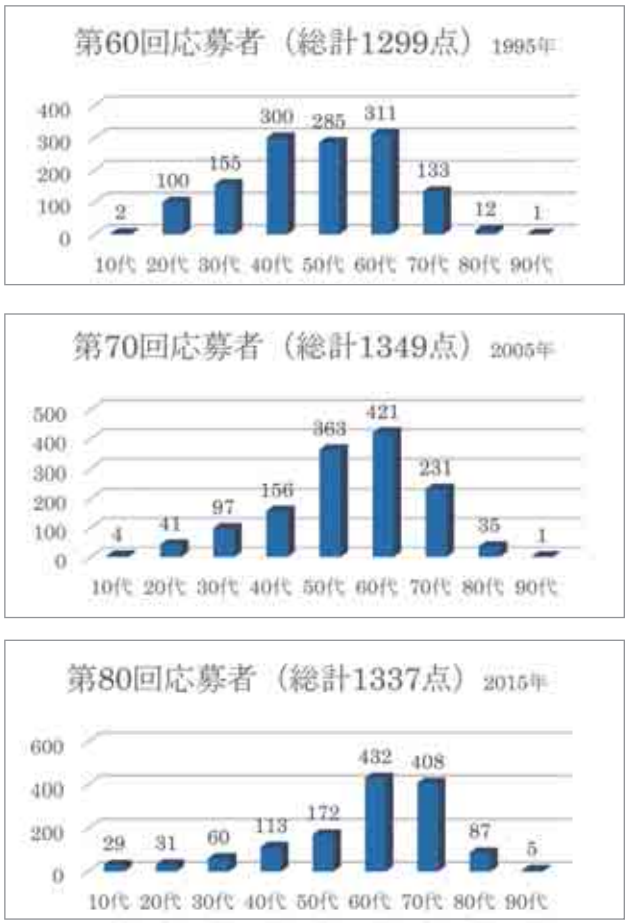

図 県展応募者年齢層の推移

第83回香川県美術展覧会
ポスター

日本画部門の作品解説（トーク）の様子
新人賞（40歳以下）の受賞者が自作品について語る（2018年6月28日撮影）

特別展紹介

第65回日本伝統工芸展

日本伝統工芸展は、工芸分野の展覧会では唯一、国が主催に入る最大級の公募展です。歴史・芸術上特に価値の高い工芸技術を保護・育成するとともに、先人から受け継いできた優れた技を磨き、現代生活に即した新しいかたちを築き上げることを目的として開催されています。陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の7部門で構成され、今年で65回目を迎えます。今年度は全国から1,517点が出品され、622点が入選作品に選定されました。9月に東京展で全入選作品が展示された後、およそ半年間で全国11会場を巡回します。地方展ではすべての入選作品を展示するのではなく、会場ごとに作品を選りすぐり展示します。

今年度、最高賞である日本工芸会総裁賞を金工部門の前田宏智(まえだひろとみ)が受賞しました。作品名は四分一象嵌打出銀器(しぶいちぞうがんうちだしぎんき)。銀を薄く打ち延ばし、その表面に無数の細い線や面を鏨(たがね)で彫り、そこに銀と銅の合金である「四分一(しぶいち)」を入れ込み、その上で打出して成形しています。流れるように走る「四分一」が特徴的です。前田は東京藝術大学美術学部工芸科准教授です。

朝日新聞社賞を受賞したのは、漆芸部門の金城一国斎(きんじょういっこくさい)。作品名は切金螺鈿箱(きりかねらでんばこ)「青麦(あおむぎ)」。明るい緑色の色漆を背景に、細い短冊状の白蝶貝(しろちょうがい)を用いて、青々と成長する麦穂を表現しています。金城は広島県出身、香川県漆芸研究所を修了し、本格的に漆芸の道に進んだ方で、七代目の「金城一国斎」です。

1月2日から始まる高松展では重要無形文化財保持者(人間国宝)による作品48点を含む280点の作品を展示します。特に、漆芸部門は香川県在住の3名の重要無形文化財(蒟醤)保持者作品を含む全75点を展示します。展覧会にあわせて、たくさんの関連イベントも開催します。新春の華やかな展覧会です。ご家族やお友達を誘って、ぜひお越しください。

(主任専門職員　谷川 洋朗)

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

第65回日本伝統工芸展

平成31年1月2日(水)～1月20日(日) 会期中無休

開館時間：9:00～17:00(会期中の金曜日は～19:30)
入館は閉館の30分前まで
観 覧 料：一般610円、前売・団体(20名以上)490円
高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料
会　　場：特別展示室、常設展示室4・5

■作家による陳列品解説

1月5日(土)、13日(日)、14日(月・祝)、19日(土)、20日(日)
各13:30～
解説者：公益社団法人日本工芸会四国支部会員

■美術ボランティアによるギャラリートーク

1月5日(土)、6日(日)、12日(土)、13日(日)、14日(月・祝)、
19日(土)、20日(日)　各10:30～12:00
解説者：当館ボランティア

その他の関連イベントはp.8 インフォメーション欄をご覧ください。

前田宏智　四分一象嵌打出銀器

金城一国斎　切金螺鈿箱「青麦」

調査研究
ノートvol.28

昭和43年 四国山地縦走民家調査

昭和43年（1968）7月30日から8月3日にかけての5日間、日本建築学会四国支部民家研究調査委員会のメンバーが、四国山地を縦走する民家調査を敢行しました。メンバーは、山本忠司・池田秀夫・市原輝士・上野時生（香川）、四宮照義（徳島）、松村正恒（愛媛）、上田虎介（高知）といった面々。阿波池田から大川・本川・久万を経て大洲へと抜け、そこから内子・奥道後を経て西条に至るルートを、当時としては珍しい無線付タクシー2台に分乗し、気になる民家を訪ねて住人と話し、スケッチし、写真に収めました。

写真1

メンバーはそれぞれ、民家への関心と思いを抱いていました。主に写真を担当した上野は、東京での建築ジャーナリズムから帰郷して昭和33年（1958）に雑誌『四国建築』を発行、「長い年月を経て沁み込んだ先人の血と汗と苦痛に耐えた息吹」を民家に見出し、多くの号と頁を割いて四国の民家を紹介してきました。市原は、香川を代表する郷土史家の立場から、民家への関心を深めていました。また松村は、戦前に民家研究の先駆者である今和次郎のフィールドワークに参加した経験をもち、自らも愛媛の民家を念頭に置いた住宅の設計に取り組んでいました。四国山地の縦走調査行は、彼らの共同活動の総決算という意味をもっていたのです。そこには高度成長の波に洗われ、今にも消え去ろうとしている四国の民家への熱い思いと危機感がありました。

この調査行で撮影された民家には、修復によってきれいに整えられた文化財とは異なり、その土地の気候風土と生活の積み重ねがしっかりと刻まれた、「生きた姿」を見出すことができます。太いつっかえ棒に支えられ、障子にビニールを貼られた民家は、それでも分厚い茅葺屋根が堂々として、軒下には農具や漁具などの生活道具が置かれ、山での豊かな生活を物語っています（写真1）。山から引かれた竹の水道（写真2）や、雑木がくべられた囲炉裏の上に吊られた楮（写真3）、現代的な生活道具が混ざり始めた神棚（写真4）、巨岩が転がる河原にせり出した掛けづくりの家々（写真5）などは、四国山地で

写真2

暮らす人々の存在を雄弁に物語ります。

「本当に皆が熱心だった。四国の民家の研究調査というよりも、それは私達の一人一人の民家への青春賦だった」（上野）。常設展示「建築家・山本忠司　風土に根ざし、地域を育む建築を求めて」（1月26日～4月7日）では、建築写真家・上野時生の写真を通して、山本に大きな影響を与えた四国の民家調査についてもご紹介します。　（学芸課長　佐藤 竜馬）

写真3

写真4

写真5

写真はいずれも上野時生撮影

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

京都工芸繊維大学美術工芸資料館連携事業

建築家・山本忠司
風土に根ざし、地域を育む建築を求めて

平成31年1月26日（土）～4月7日（日）

会場：常設展示室4・5
ミュージアムトーク：2月9日（土）、3月16日（土）　各13:30～
建築ツアーも開催予定（詳細はホームページに掲載します）

特別展紹介

香川県陶芸協会創立50周年記念展
やきものが好き !! アートも好き。

本展は縄文時代から江戸時代の「讃岐のやきもの」と、現代の地元作家が作る新たな「讃岐のやきもの」を展示し、古来、「やきもの」の国として栄えてきた歴史や伝統、またその精神を受け継ぐ現代作家の姿を紹介する展覧会です。当館と香川県陶芸協会との共同企画で開催します。

やきものと食べもの

日本のやきものは、縄文時代草創期（約16,000年前）に木の実などをゆでて食べられるように、また食べやすくするための調理具として生まれたと言われています。香川県で出土したものでは縄文時代早期（約8,000年前）のものが最も古く、やはり煮炊きなどの道具として使われました。以来、やきものは調理具、食器、食材の保管容器など、その多くが食に関わる道具として使われ続けています。

江戸時代の個性的なやきものと現代

香川県は古代に須恵器（すえき）を税として都へ納めたり、綾川町にある十瓶山窯跡群（とかめやまかまあとぐん）で作られた須恵器の壺や甕（かめ）が西日本各地で広く利用されたりするなど「やきものの国」として栄えましたが、再び盛んになるのが江戸時代です。

この時代には高松藩の御用窯である理兵衛焼（りへえやき）と讃窯（さんがま）、独特のデザインと技法をもつ源内焼や屋島焼など、地域の歴史や風土に根差した新たなやきものが誕生しました。

そして、これらのやきものは現在でも地元作家に大きな影響を与えています。

「アート」なやきもの

やきものは形を自由に作ることができるため、誕生以来、様々な形やデザインのやきものが作られてきました。また、生産設備や制作技術などの発展により、江戸時代には真っ白な磁器や多彩な釉薬を用いた華やかな陶磁器も生まれました。

【理兵衛焼】亀甲形大香合（きっこうがたおおこうごう）　紀太理兵衛（きたりへえ）　江戸時代　当館蔵

【讃窯】乾山写雲錦丼鉢（けんざんうつしうんきんどんぶりはち）　仁阿弥道八（にんあみどうはち）　江戸時代後期　当館蔵

【源内焼】三彩花文手付小碗付連鉢（さんさいかもんてつきしょうわんつきれんばち）　江戸時代中期以降　当館蔵

その後、明治時代以降、主に鑑賞を目的とした製品がさかんに作られ、さらに戦後には立体的なやきものによるオブジェも出現しました。このように「アート」作品としてやきものを制作する動きは現代につながっています。

本展ではやきものが縄文時代に食の道具としてはじまり、江戸時代に形・デザイン・色彩が多様化し、個性的なやきものが盛んに制作され、大きく発展したこと、そして現在では食器などの道具だけでなく、作家が伝統を大切にしながら、自分らしい表現にこだわって制作するやきものも現れた歴史を、現代作家の作品とともに紹介します。

身近なやきものに込められた歴史と美を楽しみながら、さらに親しんでいただく機会となれば幸いです。

（文化財専門員　長井 博志）

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

香川県陶芸協会創立50周年記念展

やきものが好き !! アートも好き。

平成31年3月5日（火）～3月17日（日）

開館時間：9:00～17:00（入館は閉館の30分前まで）
観 覧 料：一般500円（本展のみ、常設展は別）
会　　場：特別展示室

関連イベントはp.8 インフォメーション欄をご覧ください。

常設展示室 1

道具とくらしのうつりかわり

平成31年1月2日（水）～2月24日（日）

わたしたちの生活で使われるさまざまな道具。時の経過とともに変化してきました。

1950年代中頃までは、ご飯炊きや洗濯などの仕事がおもに人の手により行われ、たいへん時間がかかりました。しかし、羽釜やめしびつ、洗濯板、炭火アイロンなど、その当時使っていた道具を見ると、形や材質、仕組みなどに人々の知恵がこめられています。

人々の生活を大きく変えたのは、電化製品でした。香川県の電気の使用は、明治28年（1895）、高松市で初めて電灯がついたときに始まります。しかし、多くの家庭で電化製品を使うようになるのは、1950年代終わり頃からでした。電気洗濯機・白黒テレビ・電気冷蔵庫はその代表的な製品です。その後も開発・改良が進み、電化製品はわたしたちの快適な生活になくてはならないものとなっています。

この展示では衣・食・住の電化以前の道具とさまざまな電化製品を通して、人々の生活の移り変わりを見ていきます。小学校の社会科や総合的な学習でご利用ください。また、一般の方も昔なつかしい生活に想いをはせてみてはいかがでしょう。

（主任専門職員　藤田 順也）

■ミュージアムトーク／1月26日（土）、2月16日（土） 各13:30～

洗濯板・たらい 当館蔵

電気洗濯機 当館蔵

常設展示室 1

春を探そう ―表現された春―

平成31年3月5日（火）～4月21日（日）

十二月和歌画帖
高松松平家歴史資料
当館保管

今年の冬も、寒くなるのでしょうか――。

昨今、気候が猛暑と厳冬に二極化しつつあるといわれていますが、古来、日本は春夏秋冬の四つの季節が移ろい、人々はそうした季節の移ろいに感覚を研ぎ澄まし、愛でてきました。

厳しい冬の寒さの先には、生命の芽吹く季節―春―がやってきます。春の訪れを告げる鳥たち、桜に代表される花々、地上に姿をみせる虫たち…。彼らの姿から、寒さからの解放、生命の躍動を感じることができます。そして旧暦では、新たな一年の始まり。四季の中でも、春は気持ちの沸き立つ季節です。

今回の常設展では、春をテーマとした絵画や和歌、春をモチーフにした道具などを通じて、先人たちが季節をどのように表現し愛でていたのかについて、紹介します。様々な作品の中から春を探してみませんか。

（主任専門学芸員　渋谷 啓一）

■ミュージアムトーク／3月23日（土）、4月13日（土） 各13:30～

講演会　要事前申込

特別展「第65回日本伝統工芸展」関連
◎文化力競争時代の日本工芸

国の内外で文化の魅力を競い合う時代になった今、日本工芸の未来展望を語っていただきます。

林田英樹氏

日　　時：平成31年1月6日（日）　13：30～15：00
場　　所：地下1階　講堂
講　　師：林田英樹氏（日本工芸会理事長、元文化庁長官）
定　　員：230名（先着順）
申込期間：受付中～、定員になり次第終了

学芸講座　要事前申込

①ミュージアム・プレゼンテーション2019

当館では歴史、民俗、美術などについて、日々調査研究が行われています。今年度の研究成果をダイジェスト版で発表します。

日　　時：平成31年2月3日（日）　13：30～15：00
場　　所：地下1階　研修室
講　　師：当館職員3名
定　　員：70名（先着順）
申込期間：平成31年1月2日（水）～、定員になり次第終了

特別展「やきものが好き！！アートも好き。」関連
②「おいしい」をつくるやきもの

縄文時代から現代に至るまで、食にまつわる道具として重要な役割を果たしてきたやきもの。その歴史について、香川県の陶芸文化の隆盛と関連づけながらお話します。

日　　時：平成31年3月10日（日）　13：30～15：00
場　　所：地下1階　研修室
講　　師：長井博志（文化財専門員）
定　　員：70名（先着順）
申込期間：平成31年2月1日（金）～、定員になり次第終了

講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、かがわ電子自治体システム(※)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、講演会・講座の名称を明記してください。

申込先：〒760-0030　高松市玉藻町5番5号　香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247　FAX.087-822-0049

ワークショップ　要事前申込

特別展「第65回日本伝統工芸展」関連
①子どものための伝統工芸鑑賞事業
「うるしにチャレンジ（蒟醤）」

香川漆芸の三技法のひとつ「蒟醤（きんま）」を使った作品づくりにファミリーで挑戦!

昨年度の様子

日　　時：平成31年1月12日（土）
　　【午前の部】9：30～12：30
　　【午後の部】13：30～16：30
　　※応募の際に午前・午後のどちらを希望するかを明記してください。
場　　所：地下1階　研修室
講　　師：佐々木正博氏（漆芸家）
対　　象：小学4～6年生とその保護者
定　　員：午前・午後　各36名（全72名）（応募者多数の場合は抽選）
参 加 料：1名につき1,000円
申込期間：12月1日（土）～12月14日（金）　※当日消印有効

②「高松張子づくり」

讃岐の伝統工芸である張子人形。原型作りから絵付けまで、全ての工程を体験して作ってみませんか。

張子人形「奉公さん」

日　　時：平成31年2月16日（土）・17日（日）
　　13：30～16：00（2日間とも参加できる方）
場　　所：地下1階　工作室
講　　師：当館ボランティア
対　　象：一般（中学生以上）
定　　員：18名（応募者多数の場合は抽選）
参 加 料：500円
申込期間：平成31年1月10日（木）～1月26日（土）

特別展「やきものが好き！！アートも好き。」関連
③ドキドキ陶芸ワークショップ「地球を焼こう！！」

世界にひとつだけのオリジナルでアートな手作り作品を作ります。後日、大地の上で弥生時代のやり方（野焼き）で焼きあげます。

日　　時：平成31年3月9日（土）　13：00～15：00
場　　所：地下1階　工作室
講　　師：香川県陶芸協会会員・当館職員
対　　象：小学生以上（小学4年生以下は保護者の同伴が必要）
定　　員：18名（応募者多数の場合は抽選）
参 加 料：800円
申込期間：平成31年1月29日（火）～2月19日（火）※当日消印有効
＊焼いているところを見られるよ！（詳細はワークショップ時にお知らせします）
《平成31年4月6日（日）三豊市宗吉かわらの里展示館にて》

ワークショップの申込方法

往復はがき（1枚につき2名まで）、かがわ電子自治体システム(※)を利用したインターネットでお申込ください。往復はがきの場合は、ワークショップ名、氏名（ふりがな）、学年（児童・生徒の場合のみ）、住所、電話番号を明記してください。応募者多数の場合は抽選となります。抽選結果の発信・発送は締切日から1週間ほどで行う予定です。

申込先：〒760-0030　高松市玉藻町5番5号　香川県立ミュージアム学芸課

カフェポット ミュゼ

うるしでカフェタイム
日本伝統工芸展の会期中（1/2～20）限定

漆のカフェオレボウルで讃岐の郷土料理「あんもち雑煮」が召し上がれます。

ミュージアムショップ

日本伝統工芸展に合わせて、関連図録を取り揃えております。

■営業時間：9:00～17:00（1月4日、11日、18日の各金曜日は19:30まで）

瀬戸内海歴史民俗資料館　観覧料無料

古城をイメージした石積みの外観が印象的な建築は「日本建築学会賞」をはじめ多数受賞した、建築家・山本忠司の代表作。

回廊式の展示室では、木造船や船大工道具などの民俗資料を中心に瀬戸内のくらしと文化をたどります。瀬戸内海が一望できる展望台もお楽しみください。

開館時間：9：00～17：00　※入館は16：30まで
休 館 日：月曜日、12月29日～平成31年1月2日

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合
香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」
香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002（代表）　FAX.087-822-0043
http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/

【分館】**瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
http://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/

【分館】**香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10-39
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807

●発行日 平成30年（2018）11月13日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社アイコー印刷